



## ある女忍の死 「おゆう」 宏一郎

ひゅっ……。暗闇から飛んできた一本の矢がおゆうの右胸に刺さった。

鉄鎚で叩かれたような衝撃と、激痛に耐えたおゆうは、悲鳴を咽喉へ押し込み、辛うじて漏らさなかったが、息が出来ず、膝を折った。

矢を、抜かなければ……。おゆうの薄い黒装束、そしてその下にひそめた鎖かたびらは矢を防ぐ何の役目もしなかった。

激痛に薄れていく意識のなかでおゆうは任務の失敗を思った。

ここは將軍府江戸より百余里離れた上州、山地に囲まれた小藩の城内。

謀反の噂の真相を確かめるべく潜入した甲賀の女忍者おゆうに、絶対の危機がおとずれた……。

何者かの近づく気配に、囚われの女忍者おゆうは我に返った。

ぶるつと一度、その不自由な細身を震わせ、すぐ現状の悲惨さを再認識する。

絶望感、そして全身のたまらない苦痛が改めて彼女を襲い、狂おしい気分で泣き叫びたくなる。

頭上高く両手をひとつに括られ、吊し上げられた自分自身の裸体から立ち上る異臭がむつと鼻をつく。

体臭、血と、男の精液、汗臭さがまつわりついた素裸の自分。

捕らえられ、括られ、ここに引き込まれてすぐ全裸に剥かれ、言語に絶する責

めの連続、五人の男による繰り返しの凌辱。

てだれの女忍おゆうでなければ気が狂うか、少なくとも生きる望みを失っていたはずだった。

おまえは何者だ、どこから来た、誰に頼まれた、言え、言わぬところだ（そして彼女は鞭打たれた）、言え、言わぬところだ、痛いぞ、苦しいぞ（そしておゆうは赤く灼熱した焼き鑊を押し当てられ、したたか悲鳴をあげさせられた）、怪我をするぞ、そら、かたわになるぞ、泣け、呻け（そして誇り高い女忍だったおゆうの細やかな裸身は粘土人形のように無残な変形や大股開きを強いられ、屈辱に呻いた）、そうか、吐かぬか、裸にして、こうまでしても思い通りにはならぬ強情なあまなのだなおまえは。

だが、われわれを舐めてはいまいな。

おまえのきれいな顔も、そのほっそりと見事な手足も、今のところさほど傷つけてはいないが、それもおまえのためにそうしているわけではないぞ。

まだまだ、おまえは女として味わえる、楽しみ甲斐があると思うからだ。

だが、ここまで強情なおまえのことだ。

まともに抱き回してもかえって悦びかねぬな、だから趣向を変えて、こいつの軀の穴という穴をそれぞれ同時に皆で攻めまくってやろつかい、云々 云々。

そしておゆうは冷たい土間の上で淫獣と化した五頭の雄種にそのおぞましい文句そのまま欲情のための柔らかな道具として激しく、延々とむさぼられ続け、血を流し、窒息の苦しみに悶え狂った。

それがつい半刻前まで続いたのだ。

おゆうがそんな地獄の一昼夜をなんとか正気で耐えられたのも、自分は公義お庭番、甲賀の女、選ばれた女忍なのだという誇りと、それに自分をこの重要な任務に抜擢してくれた組のおやかたさまへの恩義、そして、何よりも彼への密かな、強い思慕の気持ちゆえだった。

もちろん何度となく死を思った。

自分の任務が失敗に終わrittつあることへの絶望、責任感、打ち続く拷問の余りの辛さも彼女を死の甘美な誘惑へと誘った。

ああ、辛い、いつそのまま死ねたら、どんなにか楽なことだろう。

死にたい。しかし、女忍には自殺は許されなかった。

生きて任務を完う出来る一妻の望みが残されてある限り、よほどの深手を負つて、いずれ死ぬか、殺されることがはっきりしていない限り、どんなに苦しくとも彼女は生き抜かなければならなかったのだ。

おゆうは、確かに重傷を負っていた。

右胸に矢をのぶかく射込まれ（それが昨夜遅くこの城へ密かに忍び込んだおゆうの受けた手痛い挨拶だった）。

大抵の傷の痛みには耐えられるおゆうも、この深傷には平気でいられなかった。気を失わずにいるだけで精一杯だった。苦しみつつも何とかその場で抜き取ったものの、形の良い乳房に開いた傷口からは随分血が流れたし、警戒を強めていた城内の警備陣を突破して逃げおおせるための彼女の気力、体力は身内の矢を抜き取るために使い果たしていた。

もちろん、彼女が自身に刺さった矢を抜かなければ、そして止血の方法を知らなければ、おそらくそれは致命傷になったはずだった。

ともかく、今、そのひどい傷はなお疼きはしても、とりあえず出血は収まっていた。

なにしろ、おゆうのすべやかな細身をいろどる血の色は、ほとんどその傷から流れ出たものだったのだ。

拷問者たちはうら若い女忍の深い傷をもともせず毅然と黙秘を続けるその驚くべき気丈さけなげさに内心舌を巻きつつも、その悪辣さ残酷さを剥き出しにして、彼女のあらわにされた敏感な部分、ひ弱な局所を次々にいたぶり責める次いでに、当然のようにそのむごたらしいまでの傷の目立つ乳房を荒々しく驚掴みに掴んだり、更に傷口に指を差し込んであざとくいたぶったり、果てはなま塩を揉み込んで女を苦しめたりはしても、傷自体には何の手当も施さず放置したままだったのだ。

おゆうは、しかし、その凄まじいまでの休まない尋問、拷問を耐えに耐えて、押さえ切れない呻きや悲鳴、涕泣を別に、何ひとつ言葉を発することなく、その反抗的な伶俐の表情を変えなかった。

尋問者たちは、そのすずやかな、少女めく清浄な美貌からは想像も出来ないほどの強情さ、ほっそりとしてはいたが既に成熟した白無垢の見事な肢体（もつとも、鞭跡や自らの血で彩られてはいたが）からは想像も出来ない強靱さと底知れない体力（拷問はさまざまいい体力の浪費を強いるはずだった）にほとほと疲れ（仕掛ける方も同様だった）、呆れ、ようやく深夜に至り、彼等の都合からこの女捕虜に一人だけの僅かな休息のひとときを許すことになったのだった。

傷付き、吊されたままではあったけれど、拷問に疲れ果てたおゆうはそのわずかな時間に浅い眠りをむさぼった。

一人になれば、まず逃げる努力に傾注するべきだろう。

おゆうもそれは考えた。

しかしそれは無駄だった。

両腕は太い鉄鎖で固く縛られ、両足首も鉄の輪がはめられて石畳の床に固定されてあった。

おゆうの細い軀は首を回す自由しかなかったのだ。

それで彼女はさきほどから耐え続け、隠し続けていた尿意をその場で解き放ち、

すぐ眠りを選択したのだった。

僅かなその、彼女にとってのささやかな安らぎの時間は、しかし半刻と続かなかった。

再び悪らつな拷問者たちが彼女の吊されてある部屋へ戻ってくる気配だ。

いずれまた来ることだとは知っていても、それが現実となれば正気のままのおゆうの気が安ろうはずもなかった。

ああ、また地獄の時間が始まる。

おゆうは再度細身を震わせ、悲しげな吐息を漏らした。

しかし、入ってきたのは一人、若い小姓めく前髪立ちの少年だった。

凄惨な裸の女をはずに見、驚き、戸惑いを隠せない。

おゆうもまた驚き、拷問者たちには感じなかった軽い恥じらいを思った。

少年は赤らみつつ目を伏せ、貴女をお救いします、といった。

既にどこからか捜し出してきた鍵と工具で何とか彼女の手足の枷を解き、よろめきつつも歩けないこともないおゆうを介助しつつその部屋から抜け出した。

少年は、十五、六といったところだろうか、すでに女としては大柄のおゆうと変わらない体格、力もあつた。

身なりも悪くなく、彼へ身を密着させるおゆうは自分の汚れ切った軀、あまつさえ、小水で濡れた下肢を恥じた。

狭く暗い廊下を半ばも行かない内に、行く手に灯りが揺らめいた。

ああ、駄目、やつらが、少年はしきりに左右の壁を注視していたが、ここだとつぶやき、そのあたりを押しした。隠し扉が音もなく開き、二人はそこに滑り込んだ。

狭い、三畳ほどの暗闇の空間だった。

息をひそめる二人の横を多くの人数が通っていく気配だった。

逃げたぞ、追え、という罵声が聞こえ、再び通り過ぎる大勢の足音。静かになつた。

二人は暗闇に座り込んで、じつと時間の過ぎるまま途方に暮れた。

少年はしばらく経って入って来た扉を押し、開かない、と驚いたように叫んだ。

おゆうも試して見たが、扉はびくともしなかった。

二人は閉じ込められてしまったのだ。

おゆうはむしる落ち着いていたが、少年は時間がたつにつれ、焦りから戸惑い、恐怖を隠せなくなった。

少年は十五だといったが、やはり経験の差は争えなかった。

てだれの女忍おゆうは既に何度となく死地をくぐってきたし、おともも少なからず知っている。

おゆうは暗闇で優しく少年を抱いてやり、落ち着かせた。

少年は元服を間近に控えた家老の次男だったが、垣間見たおゆうに懸想し、救おうとしたのだった。

おゆうの求めに応じて、少年は城に最近生起した幕府への陰謀を細かに語った。おゆうはここで侵入の目的を達したのだった。

しかし、ここを出られなければ、彼女たちは死ぬしかなかった。

実際、二日を過ぎて、少年は高熱を発し、衰弱した。

おゆうはどうすることも出来なかった。

唾液を絞り出して渴きを訴える少年に口移しに飲ませること位のものだった。

おゆうは瀕死の少年がしきりに求めるために、添え寝から抱いてやることもした。

自分がここで多人数に凌辱もされた汚れた身であることを言ってはみたが、少年の懇願に勝てず、交わりもした。少年は満気だった。

貴女の本当の名前を知りたい、どここのひとで、なぜこんな危険な行動を起こしたのかと、辛そうな息の中でしきりに聞き、おゆうは死出の人間に嘘も言えないと思ひ、全てを打ち明けた。

突然開かなかった扉が開き、男たちが立っていた。

おゆうは彼等の周到な計略に落ちたのだった。

よくやった二郎丸、おゆう、よくも白状した。

おまえはもう不要の女になった。

そのまま城下町内引き回しの上磔刑、晒し、獄門にするが、そのけなげさに免じてここで自決してもよい。

どうじゃ。おゆうは絶望にうち萎れてはいたが、静かに問い返した。

わたしに、自裁するどのような手段が許されるのでしょうか。

短剣でも与えられれば、とおゆうは思った。

ここで存分に闘い、逃げ切ることはできなくとも何人かに手傷を負わせることくらいは出来るかもしれない。

しかし、彼女に投げ与えられたのは汚れた木仏に似せた張りものだった。

家老の小姓を小部屋に引き込んでよろしく手籠めにするほどの性悪女、ばくれんだ、だからそれでやりまくって快樂の内に狂い死ぬのがおまえには似合っているだろうよ。

おゆうは青ざめた顔でしばらくそのみすばらしい「短剣」を眺めていたが、ようやく意を決したかのように表情を引き締め、腕を伸ばすと、皆の目の集中する中で、それを逆手に両手で掴むと、やにわに自らの喉へ突っ込んだ。

あおのけに倒れ込んで苦しみ続けるおゆうを冷ややかに眺めつつ、男の一人は言った。

なに、こんなことでは死にきれまい。

張りものを引き抜いてやれ。 いずれ馬につないで引き回した、今日にでもな。

おゆうはその通り、まだ朝まだきの城下の町まちを細い首に綱を絡ませて馬に曳かれ、物見高い多くの町びとの晒しものになった。

後ろ手に括り曲げられたおゆうは長い黒髪が乳房あたりまで垂れてわずかにそれを隠すことはあってもやはり拷問され、凌辱された時のままの傷だらけ、血だらけの生々しい素裸のまま、はだしのままで、細腰に一筋の荒縄が巻かれてはあつたけれど、汚れきつた軀で何ひとつ隠し立てのない身を初冬の寒風に晒して、よろけつつも何とか自分の力で歩く力は残っているのだった。

ひとびとは彼女が触れまわりの高声の通り、当藩取り潰しを計る陰謀組織にやとわれた雌犬、賤しいお庭番の女で、はだかで城へ忍び込み、小姓の一人と情を通じて、これを殺めたという度しがたい罪を犯してこの極刑に処されたのだと素朴に信じていた。

それにしても愛苦しい顔の、美しい女だ。

痩せ、やつれてはいるが、大柄で、震いつきたいようないい軀をしている。

あの若さで、この辱めは何とも辛いことだろう。

そのうえはりつけ、獄門とは、いやもつたいないことだ。

町びとの中には、その美しさに同情して着物を着せかけてくれるものもあつたけれど、刑吏たちはそれを邪険に取り去って、自分の持ちものにする者さえあつた。

もちろん、その高声の内容を信じて石を投げたり、棒で打ちかかる者も多かつた。

その剥き出しの軀に新たな傷が増えたけれど、おゆうの静かな表情には時おりの一瞬の苦痛のゆがみは見えても、多くのひとびとは死を目前にした罪人の邪悪さも、怯えも、悲しみの影すらも捜すことは出来なかつた。

夕刻近く、おゆうの一行は町はずれの刑場へ着いた。

竹矢来に囲まれた刑場で、おゆうはその全裸の身を刑柱に括りつけられて三日間を晒しものにされるのだった。

大抵の罪人は衰弱し、絶望から三日を待たず死ぬ。

入り込んだ犬に足から噛みちぎられたり、カラスについばまれたりして無残な死を迎えるものも多い。

四日目の朝、刑吏がその死体を降ろし、首を切つて獄門台に置くのだ。

刑柱に引き上げられる時、その冷え切つたおゆうの軀に厚かましくもさわりつつ、刑吏の一人が言った。 裸んぼさん、これから三日間の磔刑は辛いもんだぜ。

どうだい、今そのしつとりした可愛い口を存分に吸わせてくれたら、あとでまあ首を締め折つてやろう。 いずれ死ぬんだし、すぐ極楽へ行けるぜ。

おゆうは顔をしかめて応えた。嫌、どこにも触らないで。

私は生き抜くのよ。三日でも、一週間でも耐え抜くわ。

男は邪悪な表情であざわらった。ほう、このごに及んで唇ひとつが惜しいってかい。

権高なばくれんだぜ。賤しい庭番の娘っこが。

俺の立場じゃあ、おまえのいのちなんざどうにでも出来るんだ。じゃあ、好きにしるい。

カラスがおまえの可愛い目を突っ付きにきても、追いつたりなぞしてやらねえからな。

そうさな、犬どもに足首や太腿を食いちぎらせるようにけしかけてもやるうな。

しかし、その刑吏は言うほどには邪悪でもなく、おゆうの三日間の消え入りそうな生命の灯をなんとか守り続けてくれたのだった。

もちろん、若い女の全裸のはりつけ姿を見ようと連日矢来を取り巻いた町人に恐れをなしてカラスや野良犬どもが刑場の近くに來なかつたことも幸いしたのかももしれない。

その冬近い日々がさほど寒くもなかつたこともあつたのかももしれないし、中の日にはおゆうの渴きを多少は救ってくれた雨も降り、全裸の身を雨に打たせ、ずっぱりと全身を濡らせつつ、寒さに震えつつもおゆうは髪から滴る雨のしずくを舐めて辛かつた渴きをわずかであれ癒したのだった。

ともかく過酷な三日間の刑を終えて、おゆうはなお生き続けた。

それは滅多になかつたことだったが、藩の刑法に従い、惨い晒し刑を生き延びた女囚はお構いなしとなつた。

もつとも、城下には居られなかつたし、衰弱が激しく立つことも出来ず、引き取り人も現れなかつた女を見かね、不憫に思つた刑吏は近くにある自分の掘つ立て小屋へ歩けない彼女を背負つて歸つた。

意識もなく半死にの状態で、いずれ死ぬかもしれないが、しばらくは様子を見て、もし元気になつたら、男の知っている近在の女郎宿へ「やつこ」として売りつけようかと思つたのだ。

「やつこ」の女郎は年期も定めず、死ぬまでそこで体をひさぐことになる。

死に損なつた庭番の女にはそれ位が相当だろう。

男もそれでなにかの金を得る目算があつた。

いや、女の若さ、美しさを考えれば、意外な値になることも考えられた。

ひどい衰弱で、逃げることもないだろうとは思つたが、念のために着物を与えず、土間の隅にわらを敷いて寝かしておいた。

少しずつ粥なども与えた。

もちろん夜昼を問わず欲情すると抱き、口移して食べ物をやつたりした。

おゆうは二日も経つと目を開き、状況を理解したようだったが、弱った体では何ともできず、諦めたようだった。夜は這い出して外で排泄もしたし、裸でいることにさほど違和感を持たないようだった。

刑吏の男を嫌がらずに受け入れられるようにもなった。もつとも、感情を現すことはなかったし、感謝の意思を見せることもなかった。立ちふるまいが出来るようになり、回復が著しくなつて、刑吏は女が相変わらず感情を見せないままではあつても、男の日常の世話などはじめるのを見、惜しくもあつたが金も欲しかった。

それで彼が女郎屋のおかみを連れて来たとき、女の姿はなかった。おゆうはなお幼児のように湯文字ひとつ与えられず遇されていたけれど、汚れた手拭いが一本、小屋の内からなくなつていた。

では、彼女は逃げたのだ、薄い布切れを裸身に巻き付けて冬日の中へ。

一方、城内では処刑された女忍がたまたま話題にのぼつた。

何、三日のはりつけ、晒しに生き抜いて、許されたと、それはまずい。やつは城の内情を既に知っている。

死ぬことが決まっていると思つてそのままにしたが、ぬかつた。

女は殺さねばならぬ。衰弱しているはずだから、捉えるのは容易だろう。

捜し出して、斬れ。急遽刺客が走つた。

裸の女の足取りは比較的容易に辿れた。

江戸へ向かう道に沿つて警戒が強められた。

三日後、藩境の関所が緊張した。近くで女が目撃されたのだ。

甲賀組の若い首領、陣八は一と月前の約束通り、藩の国境近くの茶屋に来ておゆうを待つていた。

先ほどから、今越えて来た関所の陣屋があわただしくなり、警戒が厳しくなつた。

陣八は、自分に係わることもないだろうと思いつつ、注意をそちらに向けた時、こつりと石が足元に転がった。

その石の方向、暗い茂みの中に人の気配がした。

陣八は腰をあげ、怪しまれないようにさりげなくその茂みへ近付いた。

汚れた手拭いで顔を隠し、草むらにひそんでいるのはおゆうだった。

二人だけに辛うじて分かる、共通の小さい声と言葉でお互いに話合つた。

おゆうの得たこの藩内の陰謀はことごとく陣八の記憶に移された。

おゆうは話し終え、安堵の溜め息を漏らした。

おやかたさま、私は幸せです。

おやかたさまの、いや陣八さまのお姿を心に留め、これで、私は思い残すこと



なく城内へ戻れます。ごきげんよう。陣八は不審に思った。彼女の任務は終わったのではなかったか、それに……。おゆう、どうして出て来ぬのか。

おまえの美しい姿を俺に見せてくれ。

任務はともかく、そのために俺はここまで来たのだ。

おゆうの感情を押し殺した、最後の声がかきこえた。戻って下さい。

私は追われる身で……。ああ、もはや危険です。

陣屋からひとが来ます。陣八もそれと悟った。小用を済ませた風にさりげなくその場を離れた。

半刻ほど時間を潰した陣八が再び関所を過ぎようとした時、人だかりがあった。

多くの役人どもがひとつの唐丸籠を護るようにしてひとびとを遠ざけている。

遠目にもその中で手足を括られ、正座している人間、罪人、女？の異様な感じに陣八は目を剥いた。おゆうだった。

しかも人目の繁夥な中で、彼女は全裸に近い姿だった。

ただ胸に強く食い込んだ縄目の他、腰に浅く巻いた手拭いだけが女の肌身をわずかに隠していた。

思わず叫びだしそうになるのをこらえ、陣八は女をよく見ようと群がる旅の男たちに混じり、その、一度は世帯を持つかというところまで気心を合わせた女の無残な姿を凝視した。

おゆうは静かに目を膝に落として、観念しているようだったが、やはり目には見えない力を感じたのか、陣八の視線に気付き、ちらと伏し目ながら、一瞬この方を見た。

それだけだった。周囲で町人の話声が聞こえた。

凄いなだ、あの格好で、城下からここまで逃げて来たんだぜ。

陣八は気付いた。では先の再会の時、既におゆうはこの姿だったのだ。

どんな辛酸を舐めたのか、俺の目を恥じて姿を隠していたのだ。

よほど、陣八は後刻この唐丸が移動する時を襲って、彼女を救いたいという気分に分かれた。

しかし、彼は今日中に江戸へ戻らねばならなかった。

不憫ではあったけれど、使い捨てられるお庭番の運命は大抵報われず、このよくなものだったし、陣八自身はおゆうへの恋情も冷めていた。

彼女の命を救うことで自身の身分を明らかにし、ひいては甲賀組をあやうくさせたくはなかった。

くるりとその場を離れた。

陣屋から、たすきがけをした、見るからに妖気立った、汚れた様子の男が抜刀

して出てきた。

ああ、人斬りだ、処刑人だ、陣八は同じ種族の鋭い勘でそう思った。逃げるな、怪しまれる。陣八は立ち止まり、その場から再び唐丸箆の方を振り返った。

ざわめきが静まった。

驚いたことに、処刑人は女を箆から出すこともせず、女の正面から抜き身を箆越しに突きつけ、その反応の少ないことで舌打ちした。いい度胸だぜ。

一度ははりつけ獄門で死んだ女だ、覚悟はしてるよ、旅人の声がまた聞こえた。抜き身の男はやがて無造作にその下腹部を突き、ぐりぐりとえぐった。

女の小さな悲鳴が聞こえた。

陣八は冥目した。自身で痛みを覚えた。辛かった。

男は女の苦しみを見ていたが、頃合いを計り左右の脇腹を突いた。

女の押さえた呻き声と、しかし押さえ切れない悲惨な反応を楽しんでいる風だった。

陣八はその処刑人の残虐さに激しい怒りを覚えた。

しかし怒りはただ空しく、彼の頭上から鉛色の冬空へぐらぐらと立ち昇っていただけだった。

完

宏一郎 作

編修 あきら